

「うた乃」セル苗（406穴）本圃直接定植法栽培暦

バージョン：1.0版
更新日：2026.8.4

★品種の特性

- 種子繁殖型品種であり、親株からの病害虫の感染を防ぐことができる。
- 12月上旬から出荷できる早生性もち、草勢が強く連続出蕾性が高い。
- 果形はきれいな円錐形、果色は光沢のある赤色。
- 食味は糖度が非常に高く、特徴的な風味を持つ。
- 炭疽病に強い。（罹病しないわけではない）

★主な栽培の注意点（高設培地への定植時、出蕾前）

- 定植前、培地から前作の残肥料分を十分真水で洗い流し、排液ECを確認しておく。
- セル苗が届いたら、速やかに定植する。
- 定植は7月下旬～8月上旬に行い、定植3週間程度まで窒素を効かせた管理を行う。
- 農薬の使用回数は、播種から収穫終了までの期間が対象となる。
- 花房を外側に出させるために、定植は苗を寝かせて植える。
- 「うた乃」は「よつぼし」より高温に弱い傾向があり、本技術は高温対策と適切な給水管理が前提となるため注意する。

★主な栽培の注意点（開花期以降）

- 心止まりが発生しやすいため、予備の芽を残しつつ春先の芽数は3～4芽までとする。
- 過剰な窒素供給が縦溝果や空洞果を発生させる可能性がある。
- 根量が少なく、根が乾燥に弱い傾向にあるため、灌水不足に注意する。

月	7月			8月			9月			10月			11月			本ぽ 12月			1月			2月			3月			4月			5月		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
作業				定植			葉かき			葉かき			葉かき			摘果			摘果			摘果											
	納品したセル苗			10月まではポットの育苗管理と同様に展葉3枚程度をキープする			果梗折防止対策			出蕾時に葉かき・芽かき5葉程度・ド口芽も除去			無摘果では2月以降の果実の先端糖度を著しく低下させる（補2-3）			第1花房収穫			第2花房収穫			第3花房以降収穫											
作業の 注意点	○セル苗の予約を忘れずに。到着次第、直ちに定植する。			○早期の定植は11月の心止まりの発生を助長するため、8月1週目まででなるべく遅く定植することが望ましいが、生育不足とならないよう調整する。（補2-2）			○本葉が10枚程度となってきたら葉かきを開始する。病害虫対策のため小さな本葉も丁寧に除去する。			○心止まりが発生しやすいため芽かき時は予備の芽は残す。						縦溝果			○第3次腋花房の頂果で縦溝果や空洞果が多発するため、冬季のECの上げすぎに注意する。			○過繁茂を防ぐため、春先の芽数は3～4芽までとする。			○他品種と比較し、老化した外葉の葉縁が枯れこみやすい								
	※原水が0.15mS/cm程度を想定			給液EC目安※			0.3mS/cm			原水（窒素中断による花芽誘導）			0.3mS/cm			0.4～0.5mS/cm			0.6～0.8mS/cm			0.4～0.5mS/cm											
施肥管理 給水管理 CO2管理	本圃での花芽誘導となるため基肥は施用しない			0.3mS/cm以下			給液量目安			130～150ml/株程度			100～130ml/株程度			170ml/株程度			200ml/株以上														
	○定植前までに十分原水の灌水を行い、培地から余分な肥料を洗い流しておく。			○定植直後は必ず手灌水を行う			○高温期となり培地表面が乾きやすい。初期の活着が悪くなり易いため定植後3日～1週間は手灌水する。			○定植直後の高ECはチップバーン様の葉枯れを助長するため注意する。			CO ₂ 管理			450ppm以上を確保する																	
病害虫対策 特に注意 する病害	前作終了後から本圃準備			炭疽病			うどんこ病			ハダニ類			アザミウマ類			灰色かび病			うどんこ病			アザミウマ類											
	○耕起 ○土壌消毒（クオルビクリン・太陽熱） →太陽熱消毒にはなるべく透明マルチを使用する（補2-1）			購入苗を直接地面に置かない 抵抗性は持つが罹病しないわけではないため、慣行と同様、特に定植直後などの防除もしっかり行う。			気門封鎖剤も有効活用して徹底して防除する。 特に小さな葉が発生の温床となりやすいため、丁寧な葉かきと並行して防除を実施する。			越冬前に防除を行い、越冬中を減らす			気温が高くなってきたら防除を徹底する			灰色かび病発生圃場は薬剤散布に加えて、早朝加温や換気により連続的な株の濡れを防止する。																	
【要注意】農薬の使用回数は、播種から収穫終了までの期間が対象となる（作途中のリセットはない）																																	

注意：農薬を使用する際は最新の登録内容を確認するとともに、農薬のラベルを確認し使用上の注意について遵守すること